

登山学校レポート（第4回講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡アゼリア山の会）

沢登りにおいて、どのような危険に注意し、どのように安全管理を行ったか。またはこれから行っていくか。また、どのようなことを学んだかを念頭にレポート。

《以下本文》

◎最もリスクが高い沢登り

登山のさまざまな山行形態の中で、雪山と並び最もリスクが高いのが沢登りと考えている。仲間との意思疎通がスムーズにやりにくいのは、沢登りのリスク要因の一つだろう。

今回、先頭の講師が滝の登攀後に上からロープを投げる場面で大声を出しても、滝音にかき消された。難しそうな滝が現れたり高巻きが必要な場面に来たら、仲間と一定の方針をすり合わせておくのが肝要。

また、装備リストになかったけれど笛を持っていき、滝横の岩を「今から登ります！」のつもりで適当にピピピピーと鳴らした。しかし、事前に笛の鳴らし方と合図（例えば、「OK」はピピー、「NG」はピピピピなど）をパーティで決めておいた方がいいと思った。

◎沢登りほどチーム力が求められるものはない

過去の登山学校で、山慣れした受講生が沢登りで一人先行し、流木に足を滑らせたか何かで大けがを負い、救助も含め大変だったとの話を聞いた。私も大学時代、北海道・日高の沢の中流でリーダーが肩を脱臼し、沢の事故のシビアさを痛感した体験がある。パーティ全員の無事下山が大事でない山行はないけれど、沢山行ではそれが一段厳しく求められる。

今回、受講生が小滝の登りに手こずる場面で、講師たちが受講生のザックを下から押し上げたり自分の肩を踏み台に差し出すのを、自然に行う姿を見て心が動いた。チームの一人一人への目配せと、どんなヘルプが効果的かをその場で考え素早く動いていたからだ。「チーム力」を目の前で見た気がした。小さい滝の上部から、長いスリングを水流に垂らし後続者に握らせるといったフォローも、当たり前なこととして身につけたい。

◎何を於いても自身の安全確保

私がパーティの先頭を進み、登り上がった滝口から片手でスリングを垂らし、もう一方の手で細木を2本束ねて握り自分の支えにしていた。それを見ていた講師から「その木は支えにならない。下に引っ張られた時にあなたも一緒に落ちる」と指摘された。信頼できるアンカーがないか周りを見て探そうとせず、近場の細木に飛びついた安易さを反省した。

脱溪地点の緩い土斜面で、肩がらみによる確保練習を行った。3mほど離れた太い木をアンカーにして、スリングのガスヒッチにカラビナをかける。そこにロープを通し、末端の八の字結びを自分のハーネスに付け、平行するロープの途中をもやい結びで留め、その結び

が解けないよう輪っかにクイックドロワーをはめる。自分の安全はそれで確保。斜面が見える位置に移動し、肩がらみでフォロワー役の上がってくる講師をビレイした。講師が故意に“落下”した瞬間、体にずどんと衝撃が走った。それに耐えきれず講師側へ2、3歩つんのめり、斜面に差しかかる手前で何とか止まった。登れなかった釜滝以上に焦った。

フォロワーが落ちた瞬間の衝撃は、肩がらみだとこんなに大きいのかと驚いた。それは、自分の安全確保が不十分の状態で肩がらみをやると、引き込まれて事故になることを示していた。さらに、私の体が前に数歩分つんのめったのは、セルフビレイのロープが緩んでいたからだ。「セルフビレイは常にテンションをかけておかなくてはいけない」と前回まで繰り返し教わったことの大事さを、肌で感じる事ができた。

◎作業の時短は必須

沢に入渓している間中、一般登山道にはない緊張感が続く。足元が水中でよく見えないし石や苔が滑りやすいからか。常に衣類が濡れているせいもある。今回は8月後半で水温が冷たくなくてよかったけれど、沢登りは低体温症になりやすい山行だ。また、メンバーが大きなけがをした場合、対処に多くの時間と労力を割くことになる。緊張感はそのような諸々によるのだろうが、常に行動の迅速さと作業の素早さが求められる。

後続者へのスリング出しがさっとできるよう、ザックを背負った後にスリングを肩のタスキ掛けにして両端をカラビナで留めるやり方を教わり、早速実践してみた。

また、使用ロープのザック入れは、協力すると俄然速くなるのを改めて感じた。ロープ持ちのメンバーがザックを背負ったまましゃがみ、その上でロープを通したクイックドロワーを持つ人、ザックへロープをどンドン落とし込む人、ザックの口を広げて入れやすくする人と分業すれば時短になる。時短は山行に余裕を生み、引いては安全につながる。

◎ルートファインディング能力の鍛錬

リーダーまたはサブリーダーとして沢登りに必須のスキルとして、滝を登るか巻くかの判断力もある。今回はそこを現場で学ぶチャンスはなかったけれど、出てきた堰堤の左右どちら巻きがベターかを見立てるヒントを教わった。

①左岸側、右岸側の斜面の様子をじっくり観察（斜度、岩や木の状態、安定していそうな場所までの距離）

②紙地図や地図アプリで、傾斜の細部や下から見えない岩マークなどをチェック

滝を巻く場合、地図で沢のカーブの向きを見て、内側を巻く方が距離が短くなり比較的楽、というのを初めて知った。

沢中での地図読みは、目の前の滝をクリアすることに集中してしまったせいで十分できなかった。標高347mの二股は地図に明記していたのに、現在地確認をうっかりしないままスルーしてしまったのは反省点。高度計付き腕時計を山行前日に初めて買いテンションが上がっていたのに、活用し切れなかったのが残念でした。

登山学校レポート（第4回講習）

氏名（横山淳子）所属会（アゼリア山の会）

8月20日 成竹谷成竹沢の沢登り

8時15分中之島公園出発 15時30分頃中之島公園到着

天候晴れ気温高く、当日前日共に雨は降っていなかった。

沢の水量自体は少ない方ではないどの事であったがこの日の沢は「優しい沢」であったとの事である。

沢での安全管理

- ・害虫対策として防虫ネット、オニヤンマなどを使用していた。
- ・滝口は岩が崩れる可能性があり、岩の強度の確認が必要。（浮石の危険性）
- ・巻道の際落石しない様注意する。（落石の危険性）
- ・ザックの腰ベルトを締めると、川に落ちた際顔が沈むので腰ベルトはしない。
- ・岩の形状はスラブで沢靴でしっかり立つ事で滑り難くなる。
- ・前に登っている人のフォローはここで落ちたらどうなるか予測する、相手と自分の安全確保をしながらフォローする。滑落した際真っ正面で受け止める位置は危険。
- ・リーダーがメンバーの力量を判断し危険と判断した際はロープ、カラビナで確保をした。

確保理論

[肩がらみ、ムンターヒッチ]

- ・ビレイをする人は立木などでセルフを取る。
 - ・登る時はお互いのロープにたるみが出ない様、ロープを張った状態で行う。
- お互い声を掛け合いながら行う。
- ・ロープを引く際は体を回転しながら引く。
 - ・滑落した際もお互いの安全が確保出来る状態で行う。
 - ・テラスでは引いたロープが下に落ちていかない様、ハーネスと立木の間ねのランヤードなどには左右に振り分けてかける。
 - ・時間が長くなる程リスクが高くなる為、次の行動を予測して準備を行う。

滝の処理

- ・リーダーが登攀可能かメンバーの力量をみて判断する。
- ・トップロープで登攀または巻道かを判断する。
- ・巻道の場合どの様に巻くかは、地図を見ながら、目視で尾根を見て判断する。

パッキングと防水処理

- ・ザックの外のポケットは落下などの可能性が高いので入れない。

地形図の書き込み、読図

- 磁北線、高度、尾根、沢を事前に書き込み防水処理しておく。
- 登攀前にメンバーで高度を合わせ登攀途中も高度を見ながら現在地を確認する。
- 沢の全体図を頭に入れて登攀する。

所見

クライミングシステムを使った沢登りの経験は無かった。

当日は増水無く、寒さを感じる事もない快適な沢登りであった。

落石、滑落、道迷い、低体温、害虫、釜の巻き込みなど無く、全員が怪我なく講習を終える事が出来た。講師の方々、メンバーの方々には助けていただいたり、受講生を信じて見守っていただいたり、沢山の学びをありがとうございました。